広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第64号　2015　77－83

教員養成段階における病弱教育の専門性蓄積の検討

船　橋　篤　彦
（2015年10月５日受理）

Examination of Specialty Storage in Education of Children for Diseases in Pre-service Teacher Training.

Atsuhiko Funabashi

Abstract: Recently, Education of Children for Diseases is diversified in Japan. In special school for children with chronic diseases, it is pointed out to have a lot of educational problems including teacher's specialty improvement. However, these problems had to think about not only in-service training but also pre-service training. The present paper focused on specialty storage in education of children for diseases in Pre-service Teacher Training. Subjects were students enrolled in a postgraduate course in special needs education (N=14) and junior in college (N=30). We analyzed free description filled by subjects after every lecture. The results indicated that subjects had a variety of questions and impressions depending on lecture contents. In the future, there should be more research and examination on specialty storage in pre-service teacher training, such as utilization of active learning (e.g., problem based learning), and from the viewpoint of improving the student's abilities about Information and Communication Technology, acquiring the experience of learning through WEB study designed by flip teaching.

Key words: Education of Children for Diseases, Pre-service Teacher Training, specialty storage
キーワード：病弱教育，教員養成，専門性の蓄積

１．問題の所在と研究の目的

特別支援学校の教員養成においては，教育職員免許法に記載された事項に沿い，特別支援教育の理念，制度論や障害種別の専門知識・指導法等を学ぶ為のカリキュラムが設定されている。さらに，学生達の中には，ボランティア活動等を通して，障害のある人達と継続的に係り，特別支援学校教員としての資質を高めていく者もいる。昨今では，特別支援学校が募集する学習サポーター等に参加する事例などもあり，教員養成段階の学生が教育現場の中で特別支援教育の専門性を蓄積していくことが期待されている。

その一方で，病弱教育については特別支援学校教員を志望する大学生であっても，ボランティア活動等で病気の子どもと接する機会が少ないとされている。渡邊（2014）が実施したアンケート調査によれば，特別支援学校を含む教員志望の学生において，病気のある子どもと係わった経験がある者は全体の25%であることが報告されている。障害のある子どもとの係わりについては全体の90%が経験している結果と比較しても，前者はかなり少ないことが分かる。この現状から，病弱教育は「病気の子どもが院内学級で勉強する」という固定的なイメージが付きまとっているかもしれない。このイメージが必ずしも間違っている訳ではないとしても，病弱教育の「ひとつの形態」として理解されることが望ましい。また，病気の子ども達の多くが，通常の学校で学習をしている現状，転籍等に際する諸問題と学習の空白など教育的事情に関する事項の学習が必要であろう。例えば，文部科学省（2015）による「長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査の結果」によれば，大きな病気やけがにより30日以上の長期入院をした6349人の児童生徒のうち，1186人

に学習指導が行われていないことが報告されている。この報告は，病気のある児童生徒の学習状況を示す実態調査として本邦で初めての資料であり，現状の病弱教育の大きな課題を提示するものである。これに加えて，病弱教育では例えば，小児慢性特定疾患に代表されるような「身体」疾患のみならず，心身症，気分障害，ストレス性障害など「心と身体」の両面に関連する疾患の基礎的知識と対応（全国特別支援学校病弱教育校長会，2012），子ども達の心理発達に関する知見（谷口，2011），通常学級に在籍する病弱児の問題（猪狩・高橋，2001）などについて理解を深めることが必要であろう。

そこで，本研究では，筆者が開講している病弱教育に関する「教育課程・指導法」の講義と「心理・生理・病理」の講義を事例として提示し，その講義内容とワークシートを通した受講学生の学びの様子について報告を行う。教員養成段階において病弱教育の専門性を蓄積する為の教育プログラムについて継続的に検討を進めていく資料を得ることが本研究の主たる目的である。

表1　「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義の概要

	病弱者の教育課程・指導法に関する講義	備考
受講対象者	特別専攻科学生（計14名）	
講義目標	病弱者教育では，「学習の空白を埋める」ことが大きな教育目標となる。多様な児童生徒の実態を捉え教育を行う為には，病弱者教育の教育課程や指導法（教科指導・自立活動など）について基礎的な知識を修得する必要がある。本講義では，院内学級での教育支援など病弱者教育の実際に触れながら，実践に生きる知識の修得を目指す。	
第１回	講義ガイダンスとイントロダクション	国立特別支援教育総合研究所の HP 紹介や予習・復習に適したテキストの紹介を実施
第２回	病弱の定義（学校教育における病弱）	視覚教材：病弱児の学校紹介
第３回	病弱教育の歴史（明治期～現代） 病気療養児の教育について（平成6年）	視覚教材：病弱児等の教育史に関する資料①
第４回	病気療養児に対する教育の充実について（文部科学省：平成25年）	視覚教材：病弱児等の教育史に関する資料②
第５回	病気の子どもの生活と学校 (小児糖尿病を題材として)	視覚教材：小児糖尿病の子どもの生活
第６回	病気の子どものセルフケア指導について	視覚教材：糖尿病と合併症
第７回	てんかんの理解と指導について	視覚教材：てんかん発作
第８回	中間テスト（学習内容の定着を確認する）	
第９回	アレルギーのある子どもへの指導について	視覚教材：アレルギー疾患のある子どもの理解と対応
第10回	病弱特別支援学校の教育課程について	グループ協議により，教育課程や教科指導の課題について明らかにする
第11回	病弱教育の教科指導について	
第12回	病弱教育の自立活動について	視覚教材：自立活動について
第13回	病気や障害のある人達のキャリア教育	視覚教材：キャリア教育について
第14回	病気や障害のある人達の就労について	
第15回	講義のまとめ	

２．方法（事例概要）

2-1. 筆者が担当した講義の概要について

筆者がＸ年にＡ大学で担当した「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義の概要（表１）と「病弱者の心理・生理・病理」に関する講義の概要（表２）をそれぞれ示す。尚，学生評価は，出席状況，中間試験（知識定着の確認），講義最終回に実施する論述試験により行った。

また，講義の構造は，表３のような形態であった。各講義の冒頭で受講者に「ワークシート」を配布し，講義を実施した。講義の最後には，講義の疑問点・講師への質問について記載するよう指示した。ワークシートは講義終了後に回収した後，筆者が受講生の記載内容を記録し，受講生に返却がなされた。尚，各講義は，Ａ大学が示す講義シラバスに沿って進められたが，講義時間等の都合により講義回と講義内容が前後することがあった。

2-2. 各講義における指導経過について

「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義では，わが国の病弱教育の歴史的変遷を扱う中で，教育対象となる児童生徒の実態が多様化していることを起点とした。具体的には，感染症や栄養失調といった健康問題を抱えた子ども達の存在，結核や脚気といった疾患のある子ども達への教育から現代の病弱教育への道筋をたどる内容であった。また，文部科学省による通達（文部科学省 , 1994）等については，「提示された資料を通読し，翌週までにA4用紙以内でまとめをする」

表2 「病弱者の心理・生理・病理」に関する講義の概要

	病弱者の心理・生理・病理に関する講義	備考
受講対象者	学部２年生と特別専攻科学生（計44名）	
講義目標	病弱者の教育実践においては，疾患（病）の基礎的知識を有することのみならず，疾患のある人（病と向き合い生きる人）への理解が必要である。本講では，病弱者の自己管理能力や周囲の理解などを育む教育支援を行うことができるような，病弱者の心理・生理・病理に関する基礎的知識を身につけることを到達目標とする。	
第１回	講義ガイダンスとイントロダクション	国立特別支援教育総合研究所の HP 紹介や予習・復習に適したテキストの紹介を実施
第２回	病気の子ども心理について（概論）	視覚教材：院内学級の様子について
第３回	病気の子ども達の「不安」について	視覚教材：院内学級における支援
第４回	病気の子どもの不安とその支援	グループワーク：「不安」が強い子どもの支援を考える
第５回	ストレスと慢性疾患について	視覚教材：ストレスについて（概論）
第６回	ストレスと心の病について	視覚教材：ストレスについて（各論）
第７回	現代的な病としての「心身症」	視覚障害：小児心身症
第８回	現代的な病としての「気分障害」	視覚教材：「うつ病について」
第９回	中間テスト（学習内容の定着を確認する）	視覚教材：「うつ病の予防と治療」
第10回	現代的な「病」としての「愛着障害」	視覚教材：「児童虐待の事例」
第11回	現代的な「病」としての「適応障害」	視覚教材：「発達障害といじめ」
第12回	発達障害と慢性疾患の関連性	視覚教材：「発達障害と児童虐待①」
第13回	発達障害と児童虐待の関連性	視覚教材：「発達障害と児童虐待②」
第14回	医療・福祉・教育の連携について	
第15回	講義のまとめ	

表3　各講義の進行について（講義構造）

時間経過	学習活動	備考
0:00～0:05 （5分間）	ワークシートを配布し，当日の講義内容について知っている知識やイメージなどを記入するように指示する。	講義内容によっては学生同士でピアトーク等の活動を入れる。
0:05～0:10 （5分間）	前回の講義内容についてダイジェストで要点を確認する。ワークシートに記載された質問事項について代表的なものを回答する。	ダイジェスト講義の中に学生の質問・疑問を挟みこむ形態を取るようにする。
0:10～0:40 （30分間）	パワーポイントで作成した講義資料を用いて講義を進める（配布資料は適宜配布する）	配布資料は２スライド１ページとする。
0:40～0:55 （15分間）	講義内容に関連した視覚教材等を鑑賞する	視覚教材は，15分から20分程度とする。30分以上のものは2回に分割して視聴する。
0:55～1:20 （25分間）	パワーポイントで作成した講義資料を用いて講義を進める（配布資料は適宜配布する）	講義パート前半よりもペースを上げて説明する。
1:20～1:30 （10分間）	ワークシートに講義への質問・疑問・要望等を記載する	次週の講義内容について予習させる（反転授業型）講義も数回，取り入れる。

等の予習型講義も実施した。講義中盤以降では，病気の子ども達の生活を題材として，映像により生活状況を把握させた。これにより，セルフケアの力を育成することの意義とその指導について講義を進めた。また，授業時数の制約や学習の空白や遅れ，体験的な学習の不足といった教育上の諸課題について受講者間で検討する時間も設定した。講義後半では，教育課程や自立活動といった基本的事項を押さえた上で，キャリア教育といった現代的な教育課題を扱った。

「病弱者の心理・生理・病理に関する講義」では，病気の子どもや家族の心理状態を講義の起点とした。病気の子ども達がセルフケアの力を高めていく上で心理的安定が極めて重要となることについて，グループワークでの協議を通して受講者が気づいていくことを目指した。また，心理状態に影響を及ぼす生理的機序として自律神経の働きを取り上げ，ストレスと慢性疾患の関係を講じた。そして，講義中盤以降は，現代的な病として，心身症，気分障害，愛着障害，適応障害を取り上げた。また，発達障害の児童生徒についても病気や児童虐待との関連で話題として取り上げた。これらの内容については，筆者が担当してきた教育相談の事例を題材として，通常の学校にいる子ども達にとって身近な病になっている現状を受講者に理解させることが目的であった。

尚，両講義では教科書を指定せず，国立特別支援教育総合研究所のホームページに掲載されている資料や教育コンテンツの活用を受講者に促した。また，講義で扱った内容について，さらに学習を深めるためのテキスト等は随時紹介をした。

2-3. 受講者の学びに関する分析方法

今回の事例では，２つの講義で学習進度の異なる集団が混在すること及び受講者の相違が大きいことを考慮し，数量的な比較・検証を控え，受講者の学びに関する内容的な検討のみを行うこととした。各講義の特徴について検討をする為，平賀（2005）や渡邊（2013）の調査方法を参考に各講義で配布したワークシート（複写して筆者が保管したもの）に記載された受講者の講義内容への質問・感想を付箋に転記した。類似した記載内容（同一意見が２つ以上あったもの）を項目として集積し，さらに項目間で類似性の高いものをカテゴリー化した。尚，個別意見（１人のみ）については，その他に分類をした。

３．結果

3-1.「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義について

「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義における受講生の記載内容を分類した結果を表４に示す。

表4 「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義の受講生の記述分類

受講者数：14名　　記述総数：98

カテゴリー１：教育制度の現状について（32）
・転学や転籍の難しさについて考えた。
・院内学級をすべての病院に配置できないのは何故か。
・病弱教育の仕組みをもっと多くの人に知らせたい。
など

カテゴリー２：学習の保障について（25）
・「空白を埋める」はとても難しいことだと感じた。
・効果的な教科指導の方法・スキルを学びたい。
・ICT を活用すればもっと良い教育ができると思う
・難病の子ども達の学習保障はどう考えるのか。
など

カテゴリー３：医療と教育の連携について（19）
・教師はどこまで病気について学んだらよいのか。
・医療と教育ではどうしても医療が優位に思える。
・学校医と主治医の意見が異なる場合はどうなるのか？
など

その他
・院内学級で教育経験を積みたいがどのような方法があるのか教えて欲しい。
・院内学級で学んだ経験のある大学生等の話を聞いてみたい（ゲストスピーカーの招聘）。
・病気の子どもの支援について先進的な取り組みをしている学校の事例を知りたい。
など

「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義では，教育制度の現状，学習の保障，医療と教育の連携についてカテゴリー化した。教育制度については，病弱教育に特有の課題について言及する傾向が表れ，疑問を述べる声が多いことが特徴的であった。学習の保障では，病弱者の学習の空白を埋めるという目標に照らして，教科指導の意義や方法論について言及する意見があがった。一方で，学習の空白という漠然とした表現に戸惑う意見もあがり，「何を」「どの程度」埋めることが求められているのかを考えると難しいといった見解が多かった。医療と教育の連携については，医療優先というイメージの強さや教育と医療の境目について言及する意見が多かった。個別にあがった意見は，ゲストスピーカーの招聘や事例検討等，講義への要望に関するものであった。

3-2. 「病弱者の心理・生理・病理」に関する講義について

「病弱者の心理・生理・病理」に関する講義における受講生の記載内容を分類した結果を表５に示す。

表5 「病弱者の心理・生理・病理」に関する講義の受講生の記述分類

受講者数：44名　記述総数：248

カテゴリー１：病弱者への心理的な支援について(84)
・こころとからだの繋がりで子ども達を観ていくこと。
・不安を表現できる時間と場が大切だと感じた。
・家族やきょうだいの支援も重要だと思った。
・カウンセリングの技法などを学ぶ必要性を感じた。
など

カテゴリー２：ストレスへの対処について (56)
・「ストレス＝悪者」と考え過ぎていた自分に気づいた。
・ストレスと上手く付き合う方法を考えていきたい
・病気の子どもだけでなく，すべての子ども達にストレス対処について指導する必要があると思う。
・ストレス対処も大切だが，気晴らしも大切だと思う。
など

カテゴリー３：現代的な病について (43)
・心身症は「心が弱い人」がなる病気だと思っていた。
・うつやメンヘルという言葉が簡単に使われ過ぎていることが危険だと思う。
・適応障害は本当に病気なのか疑問が残った。
・愛着障害を初めて知った。病気と性格の境目が難しい。
など

カテゴリー４：発達障害と慢性疾患の関連について(37)
・発達障害と病気の関係を考えたことがなかった。
・発達障害者は病気になりやすいのか。
・障害と病気について境目がよくわからない。
・発達障害に興味があるが，病気のある発達障害は難しい感じがする。
など

その他
・自分の「こころ」についてもっと知りたくなった。
・周囲にうつ病の人がいるので助けてあげたい。
・講義を通して，自分にあてはまることがたくさんあった。一度，専門家に相談したいと思った。
など

「病弱者の心理・生理・病理」に関する講義では，病弱者への心理的な支援，ストレスへの対処，現代的な病，発達障害と慢性疾患の関連についてカテゴリー化した。まず，病弱者への心理的な支援では，病気の子ども達やその家族のこころに寄り添うことの効果について考えた意見が多数を占めた。また，病気の子ども達が自身の気持ちを表現する場としての学校の機能に注目した意見があがっていた。ストレスへの対処については，受講者本人のストレスに対する認識変化が生じたと思われる意見が多かった。現代的な病については，心身症やうつ病について，名称を知ってはいても正確な知識を有していなかったことが伺われる意見が大半であった。加えて，どこからが病気なのかといった線引きに関連した言及が多かった点が特徴的であった。発達障害と慢性疾患の関連については，病気と発達障害の関連性について整理ができないといった意見が多かった。その他では，講義内容と受講者自身のメンタルヘルスに関連付けた記述があがったことが特徴的であった。

4．考察

本研究は，教員養成段階において病弱教育の専門性を蓄積する為の教育プログラムについて今後の検討に向けた資料収集が目的であった。以下では，結果に基づき検証を進めたい。

4-1.「病弱者の教育課程・指導法」に関する講義の在り方

本講義に寄せられた受講生の意見の特徴として言えるのは，「初めて知った事柄に対する率直な見解」として集約できると考える。病弱教育を学ぶ上で入口となる講義科目であるだけでなく，他の障害と比して相対的に聞き馴染みの薄い病弱者という領域であることも関係しているかもしれない。表１に示したように本講義の講義目標は，学習の空白を埋めるという大きな教育目標に向けた現状の教育体制・制度に触れることである。その現状を知った上で，受講生が「これで十分と言えるのだろうか？」と素朴な疑問を呈することが出来る講義内容の精選と設計を考えていく必要があるのかもしれない。ゲストスピーカーの招聘や先進的な事例を知りたいという意見は，講義内容だけでは物足りないという知的好奇心の萌芽であると解することも出来る。講義前半で基礎的知識の習得に重点を置いた講義を配置し，中間テストで知識の定着を促し，講義の後半でゲストスピーカーの招聘や事例検討などを実施することを検討していきたい。また，学習の保障について，ICT 活用について意見を述べる受講生が多かった。滝川・西牧（2010）は，病弱教育に携わる教師にとって，情報共有手段を含めた ICT 活用の技能が極めて重要であることを指摘している。このことからも，教員養成段階から ICT 活用による教育に積極的に触れる機会を設定することも検討した方がよいであろう。

4-2.「病弱者の心理・生理・病理」に関する講義の在り方

本講義では，病弱者の心理的支援，不安やストレスの理解，メンタルヘルス，発達障害などの話題を扱った。その目的は，表２の講義目標に示した通り，病と向き合い生きる人への理解を深めることであった。本講義に寄せられた受講者の意見を集約すると「自分のこころとからだについて知る学習機会」として捉えられたのではないか。つまり，受講者本人が自分自身や生活状況を振り返りながら心理学や生理学の知識を修得していくことに貢献したと考える。本講義は，受講者の出席率が他の講義と比べて高く，またワークシートに記載された文字量も多かった。このことは，受講者の講義への関心の高さを表しているように理解できる。但し，受講者の中に，講義内容と自分自身のメンタルヘルスを関連付けた記述を行う者がいた点には留意が必要であろう。実際の講義では，上述のような質問や感想へのフィードバックでは慎重に配慮した形で実施したが，今後の講義設計においてさらなる検討を要すると考える。例えば，自己理解を題材とした学習方式に変更することで必要以上に「病」に焦点化しない講義設定が可能であるかもしれない。

4-3. 病弱者教育の専門性を蓄積するプログラムの開発に向けて

病弱者教育で「何を」教えるかという問題に加えて，「どのように」教えるかという点も検討を行う必要がある。アクティブラーニングの導入が強く推奨される昨今の教育において，例えば課題解決型学習（PBL）の手法を用いた講義についても検討する必要があるだろう。PBL それ自体は医学教育・医療従事者養成から創始された学習技法ではあるが，チームで取り組むこと，問題を発見する力の向上は特別支援学校の教員養成においても有効であると考える。とりわけ，病弱者教育においては，病気そのものではなく子どもや家族，取り巻く環境までを視野に入れた教育実践が必要であることからも適した学習形態となることが推測される。これについては，実際に PBL を講義に導入した実践をもとに検証を進める予定である。加えて，ICT を活用した授業づくりについても体験的に学ぶ必要が出てくるだろう。滝川（2013）は，本邦の病弱・身体虚弱教育における教育情報の共有・活用の研究を

展望する中で，日進月歩の新たな医療体制に対応し，病気の子ども達の教育環境整備が必要であることを論じている。これらは，学校教育現場及び教員達に向けられた提言と解することができるが，教員養成段階においても扱う必要があるだろう。例えば，病弱教育の中で実施されているスカイプを活用した遠隔教育の実際等については事例検討だけでなく，反転授業型にデザインした講義において，先に受講者間でスカイプを利用した共同の学習課題などに取り組むことを設定すると受講者にとって深い学びが得られるのではないだろうか。本件についても今後検討を進めていきたい。

4-4. 今後の課題

渡邊（2013）の研究では，講義の受講者から収集した自由記述データをカテゴリーに分類し，数量的な比較を行っている。本研究では受講者の自由記述の内容面にのみ焦点をあてる結果となったが，今後，病弱教育の専門性蓄積過程を継続的に検討する上では，より客観的なデータを要すると考える。例えば，受講者の専門性が蓄積していくことが，自主的な予習や復習といった学習量に影響を及ぼすのかといった事項も検証を進めていきたい。最後に，今回の事例は，講義の都合上，特別専攻科の学生と学部２年生が混在した講義を対象としたが，専門性の蓄積という観点から，学部学生と特別専攻科学生のデータを分離して検証を進めていくことが望ましい。この点についても改善を進めていきたい。

【文献】

平賀健太郎(2005)病弱教育における困難さと学習ニーズの探索的研究. 大阪教育大学障害児教育研究紀要, **28**, 59-65.

猪狩恵美子・高橋智（2001）通常学級在籍の病気療養児の問題に関する研究動向－特別ニーズ教育の視点から－．東京学芸大学紀要第Ⅰ部門，**52**, 191-203.

文部省（1994）病気療養児の教育について．文部省初等中等教育局長通知，文初特294号.

文部科学省（2015）長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査の結果. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1358301.htm（2015年9月30日閲覧）

滝川国芳（2013）日本の病弱・身体虚弱教育における教育情報の共有と活用に関する研究動向 . 特殊教育学研究，**51**(4), 391-399.

滝川国芳・西牧謙吾（2010）病気のある子どもを担当する教師間における情報共有手段の開発に関する研究－ ICT 活用による病弱教育支援冊子の作製を通して－．川崎医療福祉学会誌，**20**, 147-157.

谷口明子（2011）特別支援教育に関する教育心理学研究の動向と展望－病弱教育に関する研究を中心に－. 教育心理学年報．**56**, 145-154.

全国特別支援学校病弱教育校長会（2012）特別支援学校の学習指導要領を踏まえた病気の子どものガイドブック－病弱教育における指導の進め方－．ジアース教育新社.

渡邊照美（2014）病弱教育に対する大学生のイメージ－病弱教育に携わる際に必要な専門性と困難さに着目して－．佛教大学教育学部論集 , **25**, 65-73.